図書館だより

No.74　　July , 2009

目　次

巻頭エッセイ　図書館と情報・・・・・・・・・・・・制御情報工学科　江頭　成人・・・1

読書のすすめ　アイザック・アシモフ著「われはロボット」

・・・・・機械工学科　南山　靖博・・・2

未来社会への道筋を求めて・・・・・電気電子工学科　山口　崇・・・3

文章を読むということ・・・・・・・・・・材料工学科　武藤　浩行・・・5

私の一冊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・各学科学生６名・・・6

リレー連載「古典への誘い」　私　と　本・・・・・・・・・一般理科　山崎　有司・・・7

平成２０年度後期図書館利用状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

Information 編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

Kurume National College of Technology library

久留米工業高等専門学校図書館

巻頭エッセイ

図書館と情報

制御情報工学科　江頭　成人

図書館は、情報の集積や検索、閲覧、その他多くの機能を有している。例えば、紙やレコード、DVDのような媒体（メディア）の進化にしたがって、図書館に視聴覚室が設置され、図書閲覧室にコンピュータが設置され、情報センター化してきた。

一方、図書館とは別に情報処理センター（電子計算機室）等にコンピュータ室が設置され、教室や講義室にはプロジェクタ等が設置され、様々なメディアを図書館外で利用する環境が整えられた。さらにはインターネットの普及により、世界が情報連結され、世界全体が図書館化しているともいえる。

この「図書館だより」には、図書館の入館者数や図書貸出状況等の利用統計情報が掲載されていて、利用数の減少がしばしば問題にされる。しかし、世界全体が図書館化した高度情報化社会において、情報を媒介するメディアを多様化すれば、個々のメディアの利用数が減少し、利用率が低下することは明白であるので、それを無理に回復させようとすることの方が、私には不自然に思える。

無理をしているという点では、教育も同じではないだろうか。「実践的」や「即戦力」がうたい文句の学校がある。しかし、卒業までのこれまでと同じ時間の中で、それらと社会の多様化への対応とを両立できるだろうか。「バランスが大事」、「無駄を削れ」とも聞こえてくるが、そもそも「実践的」や「即戦力」とは何なのか、私にはよくわからない。

そこで、私にわかる話をしようと思う。私は、総合情報センターや情報処理センターの一員として、コンピュータネットワークシステムや教育用電子計算機システムの構築に携わってきた。そこでは、利用者の使い方を想定し、枝葉から幹までボトルネックがなく、管理運用し易いシステムを構築することが要求される。私だけが使い、私だけが管理するのであれば、私に合わせて構築すればよい。しかし、システムを構築する我々以外も利用し、我々以外でも管理運用できるシステムを、我々が構築するのであるから、システムを構築する我々以外の「人」を想定する必要が出てくる。

システムを利用する「人」の実態を、アンケート等で調査することはできない。なぜなら、調査項目を決めた時点で「人」をその枠にはめている。自由記述で回答できる内容ではない。「コンピュータをどんな犯罪に利用しますか？」の問いに対して、具体的な手口の回答は望めず、対策の立てようがない。インターネットでは、世界中の「人」が利用することを考えねばならないからである。

私はその解決を本に求めた。白書、専門書、ビジネス書、教養書、思想書、ノンフィクション、小説等、これまでに読んだ本を参考にして、「人」をモデル化し（私が専門としている制御工学では、これをシステム同定という。制御対象を、把握すること。）、それを使って予測しようとした。ところが小説以外は、データ的な要素が強く、そこから「人」を「人」として捉えることが難しかった。数値やグラフからは具体的な思考や行動が見えてこず、「人」にならなかったのである。読みためた小説が、たいへん役に立ったように思う。

私の読書は、変わっていると思う。1回目、文章を追いながら、著者が構築して書き記してくれた世界を、私の頭の中に再構築する。以降、文章をほとんど追わず、活字の流れに心を委ね、再構築した世界を舞台に共演する。その再構築した世界の舞台裏、すなわち活字にされてない時の、登場人物の仮面を外した素顔や、登場しないたくさんの人物の存在に気づくまで繰り返し潜っていると、不意にその世界の向こうにいる著者を感じ、著者の現実の世界を感じ、著者に影響を与えた現実の「人」を感じることがある。著者の目を借りて、現実の世界に住むたくさんの現実の「人」を間接的に認識するのである。まるで人類が、地球上から宇宙の向こうを推し量り、宇宙全体からそれを構成する微小な粒子までを探求するかのように。しかし同時に、そこには更生の余地のない悪い「人」や犠牲となってしまう不幸な「人」が少なからず存在していることもわかり、一方を立てれば他方が倒れるという世界の負の部分も見えてきてしまう。この辛くて重い負の圧力を克服し、深い闇を受け入れて、ようやく創造や創作が可能になるのではなかろうかとさえ思えてくる。

私は、ライトノベルも好んで、読む。本校卒業生である乙一氏の「GOTH　僕の章」（角川文庫）のあとがきに、ライトノベルの地位の低さに奮起した話がある。確かにライトノベルには文学的な要素は少ないかもしれないが、情報はたくさん含まれていると思う。例えば、彼は著書の中で、科学技術を的確に使いこなしていることから、無関係の分野に見えても、そこでの経験やそこで得た知識はいつかどこかで役に立つ、無駄ではなかったという情報を読み取ることができる。また、在学中の彼の様子や本校の様子、卒業後の様子を、直接的、間接的にうかがい知ることができる。このように、ライトノベルにもアンケートや調査では入手できないような貴重な情報、特に若者の情報が隠されていると思う。

本だけではないと思う。彼は作家なので多くの情報が発信されているが、社会基盤を支えるような地道な仕事の場合には情報が無い方が、よい情報であると捉えるべきかもしれないとも思う。

そのような情報を基にして構築した「人」のモデルが適切か否かの判断は、さらに難しい。その際、小説以外の本やニュースが、ある程度参考にはなる。しかしそのモデルは、数値ではなく、自分を含む実在する「人」、すなわち〝個〟であり〝全〟でもある「人」でなければならない。情報システムやメディアの向こうの、自分と同じ「人」、自分以上に人たる「人」の存在を認めること。これも、多くの考え方に接する以外に、陶冶できないと思う。そこでまた、本を読み、他の人と議論を重ねるのである。

学生の皆さんには、授業を始め、図書館や情報システムを利用して、ノイズだらけの雑多で膨大な情報から本質を読み取り、是非とも今後の人生に役立てていただきたいと思う。

乙一氏以外にも、漫画家になった卒業生もいる。東洋思想の研究者を目指して勉強している卒業生もいる。情報としては少ないが、技術の分野では大勢の卒業生が活躍しているし、中途退学した者もそれぞれの分野で活躍しているのである。

本校に縁のあった方々が、様々な分野で活躍している。そのことを、私は教員として、最もうれしく思っている。

特集 読書のすすめ

アイザック・アシモフ著「われはロボット」

機械工学科　南山　靖博

アシモフはロシア生まれのアメリカ育ちで、1939年の「真空漂流」でSF作家としてデビューしている。アシモフの作品はSFだけにとどまらず、ミステリ、科学エッセイや科学解説、歴史書、ユーモア小話からシェイクスピアの研究書まで多分野に及び、総著作数は500冊以上である。その中でアシモフの代表的な作品がロボットSFである。この作品ではロボットが従う原則である、ロボット工学三原則（Three Laws of Robotics）をアシモフが考案しており、それを基にして作品が書かれている。そのロボット工学三原則が以下である。

第一条　ロボットは人間に危害を加えてはならない。また，その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

第二条　ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。

第三条　ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。

この理念はその後のロボット作品に影響を与えており、現在のロボット工学においても基本概念として考えられてる。

アシモフの作品には長編と短編とがあり、短編の多くは、三原則に従うはずのロボットが一見してそれに反するような行為を行う事件が起こり、その謎を解明していく内容であり、その過程が一種のミステリとなっている。「われはロボット」はその短編を一冊にまとめた「I. Robot」を小尾芙佐が訳し、早川書房から出版されているものである。

本作品はもともとは、別々に書かれたロボット関係の短編を、一冊の本にまとめるにあたって、五十年の間ロボットに携わり、老齢となり、その地位を去ろうとする、ロボット心理学者のスーザン・キャルヴィンが、ロボットのいない世界を知らない若い記者に、昔の出来事、思い出を話す内容となっている。書かれている作品は次の９作品である。

・ロビイ(Robbie)
・堂々めぐり(Runaround)
・われ思う、ゆえに…(Reason)
・野うさぎを追って(Catch that Rabbit)
・うそつき(Liar!)
・迷子のロボット(Little Lost Robot)
・逃避(Escape!)
・証拠(Evidence)
・災厄のとき(The Evitable Conflict)

この中の「うそつき」では偶然にもできてしまった、人間の心を読むことのできるロボット、ハービイについて書かれている。キャルヴィンはハービイに、ミルトン・アッシュという男性を好きだということをハービイに読まれてしまい、アッシュの心をも知っているハービイにアッシュがどう思っているかを聞き「彼はあなたを愛しています」と伝えられる。また、ピーター・ボガードはハービイに研究所の所長である、ランニングが引退を考えているかどうかをハービイに聞き、ハービイは彼はすでに辞職しており、所長の地位をボガードに譲るつもりであることを伝える。しかし、ハービイの言った事は全くのうそであった。ロボット工学三原則の第二条において、人間にあたえられた命令に服従しなけらばならないとあるため、人間の質問に対してうそをつかないはずである。ではなぜハービイはうそをついたのであろうか。その謎が後に解き明かされている。

また、この本の巻末には瀬名秀明の見事な解説が付いている。この瀬名秀明の解説を読めば、アシモフのロボット小説の足跡のみならず、ＳＦ小説におけるロボットの歴史が概観できる見事な解説だと思われる。

ちなみに、アレックス・プロヤス監督、ウィル・スミス主演の「アイ、ロボット」（I, ROBOT：2004）は、アシモフのロボットSFを題材にした、オリジナルのストーリーである。全くのオリジナルであるにも関わらず、その意思・意図において、見事にエッセンスを抽出し、長編ドラマとして一本の物語に仕上げられてる。

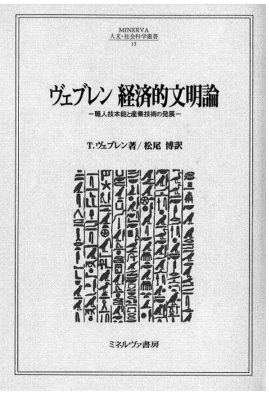
特集 読書のすすめ

未来社会への道筋をもとめて

電気電子工学科　山口　崇

どうにもとらえようのない問題にぶつかってしまったとき、それについて深く考え、語るために、あらたな視点や言葉が必要になることがあります。また逆に、あらたな視点や言葉に出会ったときに、それまでまったく気づかずにいた問題に気づき、ときにそれが、思いがけず大きな転機につながったりすることもあります。そんなときに、本の果たす役目はとても大きいものです。

工学など専門分野に関するもの以外、本などあまり読むことのない私ですが、そんな私にも、決定的に大きな重みをもつ本があります。それは、ソースティン・ヴェブレン『職人技本能と産業技術の状態』（松尾博・訳『経済的文明論』、ミネルヴァ書房）です。



8年ほど前、あきらかに社会科学の専門書の体裁と価格で売られていたこの本を私が手にしたのは、いろんな偶然が重なってのことなのですが、それはともかく、これはまちがいなく私のその後の運命を決定づけた本であって、これからもそうであり続けると思えるのです。

ソースティン・ヴェブレン(1857-1929)は、20世紀のはじめごろに数々の特異な業績をのこした、アメリカの社会学者とも経済学者ともいわれる人物で、1899年の『有閑階級の理論』（高哲男・訳、ちくま学芸文庫）はとくに有名です。『職人技本能と産業技術の状態』が世に出たのは、その15年後の1914年のことです。ヴェブレンの思想は、のちの経済学の主流からはずいぶん遠く離れたところに位置づけられているようです。そのためか、日本語に訳された書物は少なく、しかも現在手に入るのは『有閑階級の理論』と『営利企業の理論』（小原敬士・訳『企業の理論』、勁草書房）ぐらいです。世間の常識からあまりに自由すぎて、それゆえに得がたくもある、ヴェブレンの洞察にふれられる機会が少ないのは、たいへん残念なことだと思います『技本能と産業技術の状態』でヴェブレンは、人間には、ものごとをよりよく成しとげようとする本能、すなわち「職人技本能」が生まれつきそなわっているのだといいます。この本能は、ほどほどに必要にせまられ、ほどほどに余裕のあるときにだけ、その特性を発揮することができます。しかし、職人技本能はまた、そのときの社会の人々に広くゆきわたった思考習慣にも強く影響され、ときには産業技術の進歩をうながしたり、またときには逆にさまたげたりしながら、思考習慣そのものにもまた、変化を及ぼしていきます。ヴェブレンはこの本で、職人技本能と思考習慣とが互いに結びつき、からみあいながら変化してゆく過程をこまかに描き、それによって、太古の石器時代から近代の機械文明にいたるまでの人類と産業技術の歴史に、切れ目のない太い道筋を浮かびあがらせてみせるのです。

かりにヴェブレンがこの現代にいたならば、機械文明に続いた情報化社会から現在にいたる激動をも存分に描いたでしょうが、それは私たちにのこされた応用問題です。どのようにすれば、人々がその職人技本能を、人々の平和と幸福のために役立つように発揮することができるのか。そのために私たちには何ができるのか。未来の社会の主役となる若い人たちも、この本の中から、たくさんのヒントを読み取ることができるのではないかと思います。

それほどむずかしく書かれているわけではないのですが、すらすらとは読めない本です。ひとつひとつの文がかなり濃い意味を含んでいて、そのひとつひとつをじっくり考えながら、ゆっくりと読まなければ、先に進むことができません。とても根気がいるのですが、それ以上に、視界がひらけてゆくのを実感することができます。個人的には、科学技術や教育にかかわる若い人たちには、ぜひ一度、この本にふれてほしいと思っています。

図書館や本屋さんで、たまには今までまったく行ったことのない棚の前に行って、本を手に取って開いてみてはいかがでしょうか。自分にとってほんとうに必要なものは、むこうからやって来てはくれないものだと思うのです。

特集 読書のすすめ

文章を読むということ

材料工学科　武藤　浩行

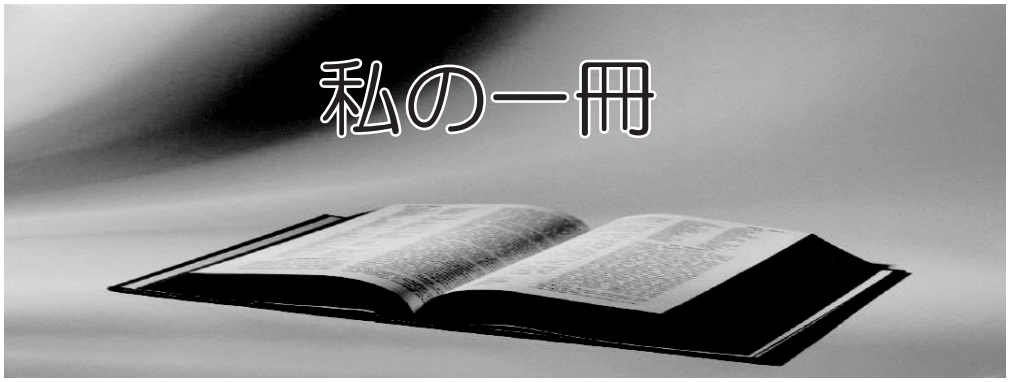
学生さん向けに「読書のすすめ」と題した文章を依頼されたものの何を書いたらいいのか、、、、。本は出張の移動中によく読むものの、人にすすめられるような崇高な理念を持っているわけではなく完全な暇つぶし、の娯楽であり、「すすめ」たところで、携帯電話、携帯ゲーム機を片時も離さない学生諸氏には無用、且つ、おせっかいな話で、全く関心を持ってもらえないだろう。更に、この文章すら読むこともないのでは、と授業すら集中できないごく一部の具体的な学生の顔が浮かんできて（笑）、こんな人生経験の少ない私のような物に、原稿を依頼された御担当各位様の本意に答えられないのでは、と筆を進めるにつれて気軽に引き受けたことを後悔（閑話休題）。

先日、中間試験があり、専門用語に関して説明を求める問題を出題した。「図示して詳細に説明せよ」と結んだこれらの問題に関して、多くの解答は、単語を羅列しただけの箇条書き。問題の意味（解答の仕方）を読んで理解できなかったのか、文章を書く能力が鍛えられていないのか、採点を悩ます答えが連発して閉口した（どこの高専、大学でも似たようなものだろうが）。筆者の学生時代はどうだったろうか、と記憶を呼び起こしてみたものの、記憶の引き出しは、あいにく別のことで溢れており、思いだせない。似たようなものだったのかな、と諦めながらも「箇条書き解答」を採点した。その後、依頼されたこの原稿を書くにあたって、学生の文章を書く能力は、落ち込んでいるのか、と改めて考えなおした。

最近の教科書、学部向けのみならず、大学院用のかなりの専門書までもが、カラーで図解、写真満載の丁寧なものが多くなってきている。教える立場としても、かなり有用で、多くの言葉を要さなくても学生に講義することができ、大いに恩恵を受けている。筆者の学生時代の教科書といえば、白黒の、ろくに図もないような難解なものが多く（筆者の誤解もあるかもしれないが）、何度読んでもイメージできず、一つ一つの文章を噛み砕き理解度を高めた記憶がある。図、写真入り教科書ではどうだろうか。

一目見ただけで、「理解したような気」にさせてくれるために直感だけで苦労せずに専門書を読み進められる。筆者が読んでも、あの時わからなかった（イメージできなかった）ことは、こういうことだったのか、とこれだけ分かり易く本を書く、先生方の筆力に関心してしまう。筆者の学生時代にこんないい本があったらば！、と悔しくなる半面、では、学生のためにはこれでよいのか、とも考えてしまう。圧倒的な説得力を持つ写真、図解は確かに重要だと思うが、文章の持つ力が伝わらなくなるのではないか。右脳を鍛えるクイズが流行したようであるが、芸術家ではない我々は左脳の論理的処理能力も同時に鍛えていかないといけないのではないか。図書館の古い専門書を手にとって今の教科書と比べてみてください。我慢して読めますか？これに我慢できないようであれば文章の理解力が足りていませんので、「意識して」鍛えてください。専門書をすすめても仕方がないので手元にある本を読んでみてください。文章に慣れてくれば理解力も高まるし作文力も改善されます。

理解不能、難解な教科書を書いてくださり、混沌の世界にいざなってくださった諸先輩方のお陰で、言葉を使って教え、研究情報を論文から得て、実際に論文を書く力がついたのだと勝手な解釈をしつつ筆を置くことにします。本当は歴史小説の面白さでも書こうと思っていたが何となく、底の浅い教育論に終始してしまったことに反省しつつ…拙文お許しを。



東野圭吾　著
秘　密
文藝春秋

自動車部品メーカーの生産工場に勤める杉田平介の人生は、その日妻と娘が乗り合わせたスキーバスが転落事故を起こすまでは平々凡々なものであった。妻・直子は重傷を負い、そのまま帰らぬ身となってしまった。小学５年生の一人娘・藻奈美に外傷はなかったものの、意識が戻らず、植物人間になる可能性が高いと医師から診断されてしまう。しかし、奇跡的に藻奈美は目覚めたのだった。ただし、その意識は娘・藻奈美のものではなく妻・直子のものとして。見た目は娘だが人格は妻。この非現実を周囲に〝秘密〟にして新しい生活が始まる。

一見して親子である二人が実は夫婦であることを隠し、ひたすらごまかす描写が面白くて声をあげて笑ってしまうほど楽しる場面もある。しかし、そんなコメディーだけでは勿論終わらず、東野圭吾ならでは泣ける伏線が後半に待ち受けている。

小説や映画などでよく題材になる「入れ替わり」だがファンタジーのような話ではなく、普段の生活の中でのリアルな視点に思わず読み入ってしまう。
犯人を考え、追い詰めるような本格ミステリーとは違う新しいミステリー小説として皆さんに紹介します。

（機械工学科５年　江頭　光明）

【図書館所蔵情報】 913‖H‖111

ダン・ブラウン　著　　越前敏弥　訳
ダ・ヴィンチ・コード<上>、<下>
角川書店

閉館後のルーブル美術館で殺人事件が起きた。殺人の被害者は、古くから続く秘密結社の総長。彼は死の直前、不気味な暗号を犯行現場に残していた。その暗号を解くことができるのは、被害者の孫娘で著名な暗号解読者でもあるソフィー・ヌヴーと、高名な象徴学者のロバート・ラングドンのみ。ふたりは事件の容疑者となる一方で、ヌヴーの祖父の殺人事件のみならず、彼が守り続けてきた古くから伝わる、驚くべき秘密の謎をも調べ始める。警察と危険な競争者の追跡を間一髪ですり抜けながら、ヌヴーとラングドンは謎に導かれるまま、フランスとイギリス、そして歴史そのものを駆けめぐる。この本は、ページを繰る手が止まらないスリラー作品に仕上がっていると同時に、西洋史の驚くべき解釈をも披露している。主人公のふたりは、モナリザの微笑みの意味から、西洋文化の大いなる謎に対して知的かつ魅力的な探索に乗り出す。ブラウンの解釈の真偽にいろんな意見が出てくると思うが、その推測のなかにこそ、この本のおもしろさがあるのだ。思わず引き込まれる『ダ・ヴィンチ・コード』は、豊かな思考の糧となる1冊である。

（電気電子工学科4年　堺　貴文）

【図書館所蔵情報】 上巻　933‖B‖17(1)
下巻　933‖B‖17(2)

司馬 遼太郎　著
竜馬がゆく
文藝春秋

アメリカ史上初となる黒人大統領の誕生や、東アジア情勢の更なる緊張など、今、世界は大きく変わろうとしている。日本は約２４０年前、歴史的な変化を遂げたことがある。長く２６０年もの間、日本を支配してきた徳川幕府が朝廷に政権を返上したのだ。

この変化の際には有名無名含めて、多くの偉人が登場する。この本の主人公、坂本竜馬はもちろん、西郷隆盛や、幕府側の人間ながらも竜馬を支えた勝海舟、三菱財閥を築いた岩崎弥太郎など、挙げたらキリが無いが、これらの人物には共通点がある。みな、変人なのだ。時代の変化には柔軟な考え方を持つ人間が必要なのではないか。そう考えさせられる一冊である。

（制御情報工学科５年　宮本 淳平）

【図書館所蔵情報】 １巻　913‖S‖105(1)
２巻　913‖S‖105(2)
３巻　913‖S‖105(3)
４巻　913‖S‖105(4)
５巻　913‖S‖105(5)

エミリ・ブロンデ　著
嵐が丘

この物語の聞き手であるロックウッドがある借家を借りるところから始まります。しかし、その家にはとんでもない血のにじむような過去が隠されていました。

家政婦ネイリから話される昔の悲劇、それはある一人の男が元凶でした。その男はヒイスクリフといい、リントン家の主人が拾ってきた孤児でした。ヒイスクリフはアンショオ家のキャサリンと仲良くなり、これをきっかけにアンショオ家とリントン家の接触が始まりました。しかし、リントン家のキャサリン等と同い年くらいの子どもであるエドガーと、その妹イザベラは孤児であるヒイスクリフを馬鹿にし始めたため、ヒイスクリフはひねくれていき、ついにはリントン家とアンショオ家の支配を企み始めました。

この物語は、人の内に秘めた心情を具体例として描いているので、少し読みにくいかもしれませんが面白い本です。ぜひ読んでみて下さい！！

（生物応用化学科３年　渡邊　日佳流）

【図書館所蔵情報】◆集英社世界文学全集36
908‖S‖20(36)
その他多数有り

畠中　恵　著
しゃばけ
新潮社

手越祐也さん主演でドラマ化された、『しゃばけ』。しゃばけシリーズには、『しゃばけ』『ぬしさまへ』『ねこのばば』『おまけのこ』などがあります。
体の弱い一太郎は、息子には砂糖より甘いと有名な両親と、何百年も生きる妖怪達と暮らしています。祖母は狐の妖怪で、その血をひく一太郎は、妖怪達と大変仲良しです。そんな一太郎の回りで、不振な事件が起き、その裏では妖怪の影が……一太郎は仲間の妖怪の手を借りて、事件を解決していきます。
人間とは少し違う考え方の妖怪達と世間知らずな一太郎が作り出す世界観は、不思議で引き込まれます。
しゃばけは、文庫本化され読みやすくなっています。不思議なお江戸ファンタジーを楽しんでみてはいかがでしょう。

（材料工学科４年　樺島　怜）

【図書館所蔵情報】
◆しゃばけ　913|H|94
◆ぬしさまへ　913|H|102
◆ねこのばば　913|H|103
◇おまけのこ　所蔵なしのため購入予定

ロバートキヨサキ・シャロンレクター　著　白根美保子　訳
金持ち父さん貧乏父さん
筑摩書房

本書のテーマは題名から推測できるように、「お金」である。著者が出会った二人の父、「金持ち父さん」と「貧乏父さん」の話しを通して、自らが稼いだ「お金」をいかにうまく働かせ人生を豊かにしていくかを分かりやすく説明してくれる。
〝経済に興味はある。しかし新聞やニュースで扱われる経済や金融の話は専門用語が飛び交い、わけの分からない数字が並んでいるだけで面白くない〟
こういった人に是非読んで頂きたい。経済に興味が無いという人でも将来のために読んで損は無い。

（機械電気システム専攻１年　半田　竜也）

【図書館所蔵情報】◇所蔵なしのため購入予定

リレー連載「古典への誘い」

私　と　本

一般理科　山崎　有司

さあ困った。どうしましょうか。締め切りが過ぎたのに、文章が出てきません。
「古典への誘い」という題で書かなければならないのに、言葉が文章にならないのです。
なぜ文章にならないのか考えると、私はこれまで「古典」という意識で物理の教科書を読んだことがなかったようなのです。大学時代に読んだ教科書は、キッテル著の固体物理学とティンカム著の超伝導入門ですが、これらは基本というか定番の本で、「古典」ということではないと思います。最も「古典」らしいのは、電気抵抗測定の基本的・代表的な手法である四端子法について書かれた論文かもしれません。非常に古い論文で、掲載されている雑誌も、ページがはがれそうになっていてコピーするのが大変でした。今では普通に行っている実験も、こうやって論文から始まったのかと感動した記憶があります。ですから、物理関連の「古典」に誘うのは無理なようです。
これまでに読んだ本の量は（冊数だけは）それなりにあると思うので、他の分野で「古典」を探すことにします。
大学時代に読んでいた本は、分野でいうなら、SFとファンタジーでした。映画もそうですが、私は娯楽で読む本に現実性や現実の世界というものを全く求めていません。ですから、かなり怪しげな科学が出てくるSFの世界や、剣と魔法のファンタジーの世界は、くつろいで楽しむことができる世界です。今でも、このような現実の世界とは違った世界を表現した本を好んで読んでいます。これらの本は、最近の日本人作家の作品が多く、「古典」と呼べるものではないと思います。

もう少し遡って高校時代を考えると、私の記憶では、日本人作家の作品で私がおもしろいと思えるSFやファンタジーの本を見つけたのがこの頃だったように思います。これ以降、平井和正や栗本薫など、角川文庫、早川書房、朝日パノラマ文庫あたりの日本人作家の本が増えました。古典といえば、源氏物語をたまに読んでいました。

中学時代は私と本の関わりにおいて、非常に重要な意味を持っています。最も大きな事件は、漫画を読むことができるようになったことです。それまで、漫画を読んでもおもしろさがわからず、何を書いているのか理解できませんでした。それが、あるとき、突然、漫画の読み方が分かり、漫画を読むことができるようになりました。私の漫画歴は約３０年になりますが、中学3年の終わり頃がその始まりでした。最初に買って読んだ漫画は、確か、キャプテン（ちばあきお作）とサバイバル（さいとうたかを作）です。

また、中学時代に起こったもう一つの事件は、私に「読書」の能力がないと気付いたことです。私は「読書」にある種の理想というか幻想を持ってるようで、その基準からいうと、自分がやっている行為はただ単に字を読んでいるだけで「読書」ができていないと気付いてしまったのです。中学3年という時は、本当に大きな１年間でした。

小学生時代から以前は、標準的な本（推薦図書の類）を読んでいました。童話を書いた絵本から始まり、子供文学などを通じて、一般によく読まれるような本を読んでいました。ただし、伝記は好きになれませんでした。定番の野口英世、エジソンなど一通り読みましたが、すぐに飽きてしまい、この分野から撤退しました。まだ生きている政治家の自伝なるものが出て教室に置かれたときには、これを教室に置くことにした先生の感性、自伝なるものを出した政治家の感性があまりにもおかしく、笑ってしまいました。この頃に読んだ本で最も印象に残っているのは、日本書紀（子供向けに現代語訳・編集されたもの）です。こういった歴史風空想物語があるのかと、驚きと感動を覚えました。それまで他の本で読んだことがあった日本武尊や因幡の白兎の話なども出てきて、以前から知っている話なのにまるで別の話を読んでいるように感じ、その驚きが新鮮でした。今にして思えば、この本との出会いが私の読む本の分野を少し「横」にずらしたのかもしれません。あれこれ書きましたが、どの時代でも必ず読んだ作品があります。それは、十五少年漂流記です。残念ながら原文で読んだことはありませんが（できません）、子供向けの大きな文字の本からページ数が増えた文庫まで、また、気に入った表装で出版されていると買って読むなど、何冊も読みました。この作者が、海底2万里、地底旅行などを書いた、私の認識ではSF作家であるジュールヴェルヌと同じらしいと気付いたとき、なんだかうれしくなりました。これらの作品は、「古典」でしょうか。

「古典」へ誘うために良い題材はないかと探していましたが、結局、自分が読んできた本の思い出を辿っただけでした。これで「古典」へ誘ったことになるのでしょうか。無責任ですが、文字数は何とか埋まりましたので、これで勘弁してください。幸いに、これはリレー連載ですので、次の担当者が正道に戻して下さると思います。

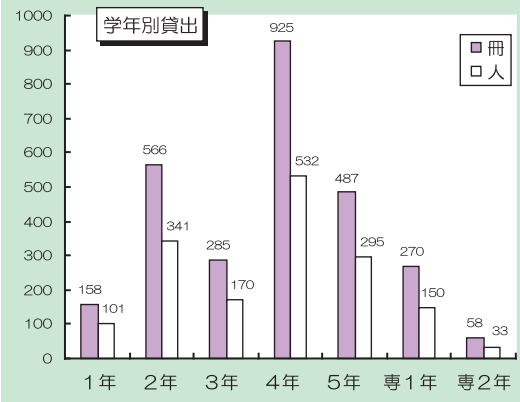
このコーナーとは関係ありませんが、アニメのことを一言書かせてください。私が宮崎作品の中で最も好きなのは、ルパン3世カリオストロの城です。そしてほぼ同等に好きなのが天空の城ラピュタです。天空の城ラピュタを初めてみたとき、すごく「宮崎作品」らしい作品だとは思いましたが、それほどおもしろいとは思いませんでした。今でも、エンディングに、例えば、小説版のような「話」が欲しかったと思っています。しかし、見る度にこの作品が好きになり、今ではカリオストロの城に迫る2位にまでなりました。しかし、私が最も「宮崎作品」らしいと感じるアニメは、未来少年コナンです。（子供が読むと）非常に退屈でつまらなく感じる原作（残された人々/アレキサンダー・ケイ著）を、あれほどまでに楽しめる作品に書き換えようとし、実際に書き換えることができたのは、感動に値すると思います。まさに「宮崎作品」ではないでしょうか。

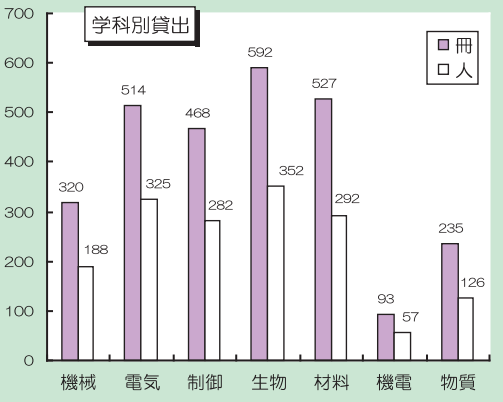
平成２０年度後期　図書館利用状況

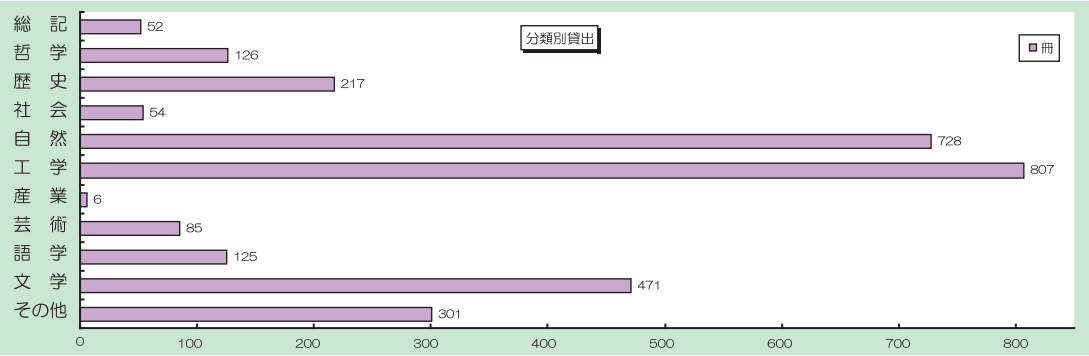
◆開館日数及び入館者数

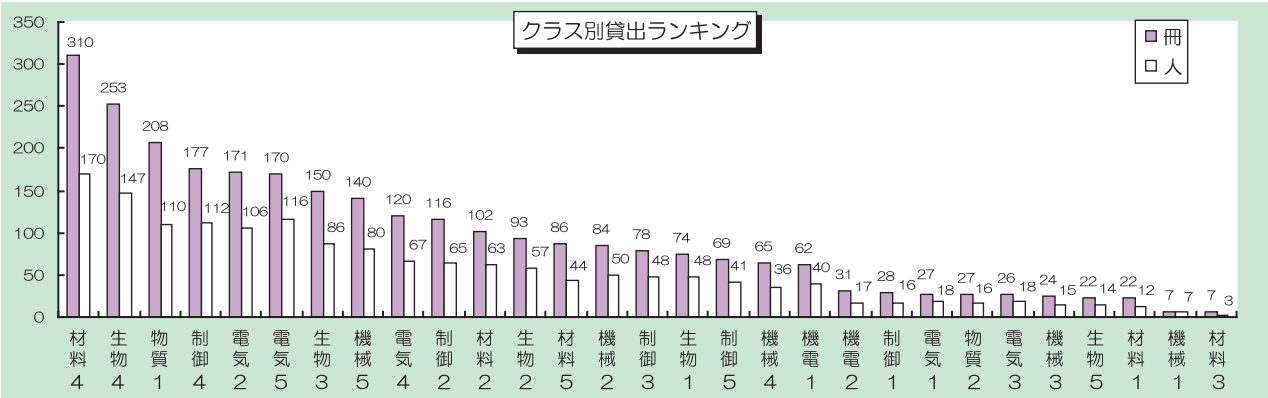
月	開館日数	入館者数 平日 時間内	入館者数 平日 時間外	入館者数 土曜日	入館者数 合計	一般利用者数（内数）	一日平均入館者数（四捨五入）	開館時間
１０	26	2,823	575	127	3,525	19	136	※平日（時間内）9時～17時
１１	23	2,752	855	394	4,001	15	174	※平日（時間外）17時～20時
12	21	2,617	503	70	3,190	16	152	※土曜日 17時～20時
1	22	3,070	853	246	4,169	13	190	
2	23	2,521	749	313	3,583	11	156	
3	23	1,282	203	75	1,560	19	68	
合計	138	15,065	3,738	1,225	20,028	93	147	

◆図書貸出状況









information

夏季休業中の、開館時間の変更及び臨時閉館にはご注意ください。

◆特別（長期）貸出について

夏季休業期間中の特別（長期）貸出を下記のとおり行います。

・貸出期間：７月１３日（月）から８月２４日（月）迄
・返却期日：８月３１日（月）
・貸出冊数：５冊以内
（一般利用者及び教職員は通常貸出です。）

◆開館時間の変更及び休館日について

夏季休業期間中は、下記のとおりです。

・月曜日～金曜日は、９時から１７時まで開館
・土、日曜、祝日及び８月１４日（金）は休館です。

図書返却日は厳守　　飲食物の持込禁止
携帯電話は使用禁止　　騒がしい行為・会話は禁止

～～　表紙写真撮影：電気電子工学科４年　屋並陽仁君　～～

《編集後記》

小子がこの欄を担当させて頂くようになって早いもので３年目になります。正直、面倒なわりに見返りのない仕事だと内心思っておりました（無造作に捨てられている図書館だよりを見るとなおさら・・・）。ところが、義務とはいえ原稿に目を通していると、先生方や学生さん達の知られざる一面を垣間見ることができ、感心したり感銘を受けたり、学ぶことしきり。今まで見たことも聞いたこともない本や分野が紹介される度、自分の小ささを実感。今では、私自身の成長のために必要な仕事だったと思えるようになりました。

＞

今回、山口崇先生が紹介されているヴェブレンの言葉：「ほどほどの必要性とほどほどの余裕が人の職人技本能を発揮させる」。なるほど、・・・と。火事場の馬鹿力的創造ということもあるのでしょうが、日常の中で繰り返し行われる小さな、しかし、かけがえのない創造活動とはそういうものかもしれません。とはいえ、現代の我々は、「必要悪に追いかけられ、全く余裕のない」毎日を過ごしているような気がします。すべての人が内に秘める、誰一人として同じものがない感性。職人技本能として発揮されているといえるのでしょうか。

＞＞

「今までしたことがないから、できない」と人はよく言います。最初からすべてできるなら学ぶという行為は必要なくなる訳で、それは人間の大きな楽しみを失うことじゃないか。学生さんに最近よくいう言葉です（自分のことは棚に上げて）。楽しみを楽しみと思えなくなってしまったのも、余裕のなさの表れなのでしょうか。

＞＞＞

「時代の変化」、「新しい時代」を誰もが口にする今日この頃、私たちはいつか、「ほどほどの余裕」を手に入れることができるのでしょうか？
さあ、学生の皆さんには、「ほどほど」以上の余裕がある夏休みです！是非、読書を！！

（図書主幹　中坊 滋一）

発行日：平成２１年7月１３日
発行・編集：久留米工業高等専門学校図書館　Tel：0942-35-9306　Fax:0942-35-9307
〒830-8555 久留米市小森野一丁目１番１号　E-mail:L-staff.SAD@ON.Kurume-nct.ac.jp